（別紙様式４）

山梨県若手研究者奨励事業　研究成果概要書

所 属 機 関　山梨県立大学

職名・氏名　　畑中　杏美

１　研究テーマ

英語圏への短期研修の効果測定：オンラインプログラムを利用して

２　研究の目的

本研究の目的は、英語圏への短期留学が、帰国後の英語学習に及ぼす効果を明らかにすることである。海外の英語講師とつながるオンライン学習を通して、短期留学経験者と短期留学未経験者に英語の習熟度や、英語学習の意欲を比較検討した。

３　研究の方法

①　オンラインプログラムの導入

夏期短期研修から帰国した学生と、短期研修に参加していない学生を混在させたグループで、オンラインプログラムを実施した。今年度はニュージーランドに短期研修に参加し帰国したての学生と、そうでない学生がプログラムに参加した。短期研修帰国直後ではない学生は学内で公募し、国際コミュニケーションを専攻している学生がプログラムに参加した。学生たちの学年やこれまでの英語学習経験は様々である。

② 英語能力の測定：TOEIC テストの受験

プログラム参加学生たちに TOEIC テストを受験させた。プログラム開始時と終了時の 2 回受験させることで、リスニングおよびリーディング能力がどれだけ向上したのかを測定した。

③ アンケート調査、分析

プログラムを受講した学生に対し、プログラムへの取り組みに対する自己評価や、**英語学習に対する意欲についてアンケート調査**を実施する。アンケートはプログラムを受講する前と後に行い、プログラム前後での比較および、留学経験者・未経験者との比較も行う。

４　研究の成果

4-1. TOEIC スコア

まず、オンラインプログラム受講前後で受験した TOEIC Listening & Reading テストの結果については、とくにリスニングにおいてスコアアップが見られた。第 1 回目のテストにおけるリスニングとリーディングの合計得点の平均と、第二回目の合計得点の平均を比べると、第２回目のほうが 10.7 点上回る結果となった。しかし、技能ごとで比較をすると、リスニングの平均点が 30 点以上の上昇を見せているのに対し、リーディングの平均は 20 点以上、下がっていたことがわかった。また、習熟度の高い学生よりも、比較的習熟度が低い学生の得点が上昇したことによって、合計得点の平均が上昇するという結果が出たことがわかる。

英語の習熟度にばらつきのある学生たちが同じ教材を用いて同じ教員に短期間集中で学ん

留意事項

①３枚程度で作成してください。

②特許の出願中等の理由により、一定期間公表を見合わせる必要がある箇所がある場合であっても、所定の期日までに公表可能な範囲で作成・提出してください。当該箇所については、後日公表可能となった際に追記して再提出してください。

だため、習熟度の低い学生にとっては学習時間が増加し、TOEIC のスコアも上昇したが、習熟度の高い学生、とくに語学試験の勉強を自ら行っていた学生にとっては、テストの結果につながらない学習体験であったのかもしれない。

4-2. 自己評価アンケート

次に、オンラインプログラム修了後に行った自己評価アンケートについては、学生たちが概ね良好な自己評価をしていることがわかった。プログラム中に課される宿題への取り組みに対するアンケート項目は一番自己評価が低い項目であった。今回、プログラムを実施したのは大学の授業期間であったため、大学の授業外での学習時間を作って取り組まなければならないという状況を困難に感じていた学生が多かったことがわかった。

それに対して、「海外に住んでいる人とコミュニケーションをとることが楽しいと思った」かどうかという項目は平均が 4.9（１，２，３，４，５の５段階評価、５が最高値）と、かなり高い自己評価をしているということもわかった。海外在住の英語講師とオンラインでつながり、実際に会話しながら授業をすすめていくライブレッスンに魅力を感じた学生が多かったことがうかがえる。

また、留学に興味を持つようになったかどうかという項目についても、平均は 4.7 と非常に高かった。元々海外留学に興味があるから参加したという学生も少なくはなかったはずだが、海外在住の講師による授業は彼らの留学に対する興味を刺激し、モチベーションを維持・向上させる効果があったのではないかと考えられるだろう。

4-3. 比較考察

最後に、短期研修帰国直後の学生とそうではない学生について比較考察を行ったが、今回の調査では短期研修帰国直後とそうではない学生との間に語学スコア・アンケートにおいて大きな相違は見られなかった。今回最も大幅に TOEIC のスコアが上昇したのは短期研修帰国直後の学生のうちの１人であったが、帰国直後ではない学生のなかにも同程度のスコアの伸びを示した者がいたため、短期研修直後であるからオンラインプログラムの効果がよく表れたと言い切ることはできないだろう。

また、今回のプログラムは 10 名で開始したものの、大学の授業や資格の勉強との両立ができないため途中で断念した学生が１名、ライブレッスンが夜の遅い時間に行われる（午後 10 時から 11 時半）ことから、実家暮らしの学生は家庭の理解が得られず断念した学生が２名いた。つまり、今回プログラムを修了できたのは７名である。興味深いデータは得られたものの、信憑性を深めていくにはもっと多くの学生について同様の調査を行う必要があるだろう。

５　今後の展望

まずは課題として、ひとつ前の項目の最後の部分でも触れたが、プログラムの導入時期と方法、そしてライブレッスンを行う際の時間を考慮すべきであると思われる。学生たちが最後までプログラムを続けることができるよう、授業等でプログラムを導入し自習課題になっていた部分を授業内で学習させることができれば学生の負担が減るのではないだろうか。ま

た、ライブレッスンは時差の関係で早朝もしくは深夜にならざるを得ないため、宿題として課し、成績要件として加算するなどの形で導入するのがよりよい方法ではないかと考えられる。

さらに、そもそも短期研修の前後で学生たちのスコアがどの程度変動しているのかを明らかにしたうえで、今回の調査を行えば、短期研修後の学習が短期研修の効果を維持するのにどの程度役立つのかについてより考察が深まったのではないだろうか。学生たちの英語学習経験についても、もう少し詳細な調査をしていくことも課題である。

しかしながら、学生にとっても、報告者である私にとってもまったく初めての試みであったオンラインプログラムは、今後も利用する価値のあるものであると思われる。修了できた学生たちはオンラインプログラム、とくにライブレッスンでの講師の丁寧な指導に感銘を受けており、英語を学び、英語を使う機会が増えたことに満足していた。海外渡航をせずとも異文化コミュニケーションをせざるを得ない、いわゆる「グローバル化」が進んでいる昨今において、自宅に居ながらにして海外在住の人々とのコミュニケーション経験を積むことができるのはたいへん有益であると言えよう。今回は学生がプログラムに参加したが、オンラインプログラムは様々な習熟度・年齢の学習者に提供しうるものとなっている。生涯学習や社会人の学びなおしにも適しているかもしれない。オンラインで英語を学ぶ効果や効能については、これからも様々な形で機会を利用し、考察していきたい。

６　研究成果の発信方法（予定を含む）

フェリス女学院大学大学院紀要に研究成果を「研究ノート」の形で発表する予定である（2019 年 3 月末出版予定）。

留意事項

①３枚程度で作成してください。

②特許の出願中等の理由により、一定期間公表を見合わせる必要がある箇所がある場合であっても、所定の期日までに公表可能な範囲で作成・提出してください。当該箇所については、後日公表可能となった際に追記して再提出してください。